東海道文学散歩

野田宇太郎著

清水・興津・富士山麓
静岡・焼津・渥美半島

野田宇太郎著

東海文学散歩

第一巻 海道篇

東海文學散歩第一巻　昭和三十九年七月十五日初版発行　著者野田宇太郎　発行者深津準之助　印刷所弘益印刷　製本所松下製本　発行所日研出版　東京都文京区大塚仲町五七　電話東京（九四一）四〇四六　定価六百円

© 野田宇太郎　一九六四

序

東海道といふ名称は昔からあつたが、今日の慣用語としての東海とか東洋といふのは比較的新らしい言葉で、いづれも東瀛（とうえい）といふ中国の文字に当嵌め、西洋から見た東方の海の彼方、英語の *Eastern sea* の訳語だと考へてよいのだらう。曾てアメリカで刊行されたヨネ・ノグチの詩集に *From the Eastern sea* があり、これを「東海より」と訳して書評したことのある石川啄木は、「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」といふ短歌を作つたが、この歌の東海は果して何処の東の海を指すのかなどと、文学離れの議論を醸したことがある。わが国の本土で東海と云へば東海道しかないが、啄木のこの歌にゆかりのある函館を考へると、その東側の海岸とも受取れるからであつた。限られた一地方の渚を呼ぶにしては東海といふ言葉の幻影は少々強過ぎるやうで、どちらにしても曖昧な名称といふよりほかはない。わたくしも「東海文學散歩」といふ本書の題名を選ぶに当つて迷はないわけにはいかなかつた。

名古屋市を中心とした本土の中央部は、たしかに東海地方と呼び慣らはされてゐるが、それは必ずしも劃然とした地区名ではない。東京に対して京都を西京と呼ぶところから、その中間の名古屋を中京と云ふ場合もある。この中京的呼び方に従へば中国とか中部とかがむしろ実質的だと思はれるが、わが国の中国地方と云へば既に山

陽山陰地方のことであり、中部ではあまりに説明的である。それより東海とした方が言葉に味はひ深い影があつて面白い。東海地方といふ言葉はさういふ結果として今日に生きるやうになつたのだらう。しかしその言葉が概念的で曖昧なことには変りはない。

それを承知の上で書物の題名としたのは、今日の東海が歴史地理的な呼び方でなく、むしろ経済地理的な呼び方だと気付いたからである。と云つてもわたくしは経済圏としてのみ東海地方を重視する者ではないが、経済圏の背景には文化圏があり、さう考へるときはじめて東海といふ地域もいくらか明瞭になるし、現代を古代からの民族文化の流れの中に置いて考へてみるのも一つの方法だと思はれる。

このやうにしてやうやく自分なりに規制した東海地方には三筋の古代からの街道が流れてゐる。一つは東海地方の語源ともなつた太平洋ぞひの東海道、一つは東山道とも呼ばれて中央山野地帯を貫く中仙道、そしてもう一つは日本海ぞひの北陸道である。これらは文化と経済を流通せしめた日本歴史の命脈でもあつた。

東海道は静岡縣の一部から愛知縣、三重縣の海岸線を走り、中仙道は長野縣の一部から岐阜縣、愛知縣の陸地を貫いてゐる。北陸道は福井縣、石川縣、富山縣、新潟縣などの海岸線を占めてゐる。これを地図の上だけで案ずるのは容易だが、実際に旅をして詳細に検討すると、必ずしも文化圏としてばかりでなく経済圏としても割り切れない複雑性が含まれてゐることに気付く。だが、その複雑性や矛盾が生ずること自体がわが国文化の性格と受取られないだらうか。それはわたくしの微力では如何に努力しても完全に捉へ得るものではあるまい。ともかく自分の力の及ぶ範囲でやるよりほかはないとわたくしは決心した。

文学の範疇は広い。文學散歩といふわたくしの仕事は、その広い範疇を利用して、自分であらゆることを確めて、出来るだけ多く広く知らうとする、その過程を記録してゆく仕事である。ただ机上だけの仕事ではないだけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に、いろいろな困難がつきまとふ。それを敢て実行に移すことが出来たのは、第三者の並々ならぬ助力があつたからである。

この「東海文學散歩」執筆に際して様々な助力を惜まず與へられたのは、先づ名古屋鉄道株式會社であつた。その中間にあつてひそかに励ましの労をとられたのは谷口吉郎氏である。また同地方の主な都会についてのまとまつた部分を逐次発表することによつて、原稿の進行をなめらかに成し得たのは全國市長會の機関誌「市政」の編輯者山浦誠氏の厚意であつた。まことに我儘な形式のこの仕事を、かうして最後に書物にしてもらふことになつた日研出版の激励と努力もわたくしにとつては忘れることが出来ない。

以上のことをこゝに記して、読者への挨拶に代へる次第である。

昭和三十九年六月一日

野田宇太郎

目次

序

清水と興津と富士山麓

清水へのいざなひ……一三
三保の羽衣……一四
高山樗牛の墓……二〇
興津……二六
清見寺と樗牛……二七
若き藤村と五百羅漢……三〇
天田五郎と次郎長……三二
梅蔭寺にて……三六
壮士墓……四二
富士山麓の次郎長開墾地……四六

静岡

久能山と静岡……五七

登呂……六一
駿府城下町……六三
鷹匠町と蒲原有明……六七
賤機山……七一
安倍川……七三
鞠子にて……七五
吐月峰柴屋寺……七九

東海道の川と山坂

大井川……八五
小夜の中山……八八

焼津（神様の村）

大崩海岸にて……九七
ヘルンと焼津……九九
乙吉の家……一〇三

防波堤にて……一〇六
ヘルンの床屋……一〇八
乙吉の墓……一一〇
天野甚助の板子……一一二
節子夫人の手紙……一一五

渥美半島　一（田原）

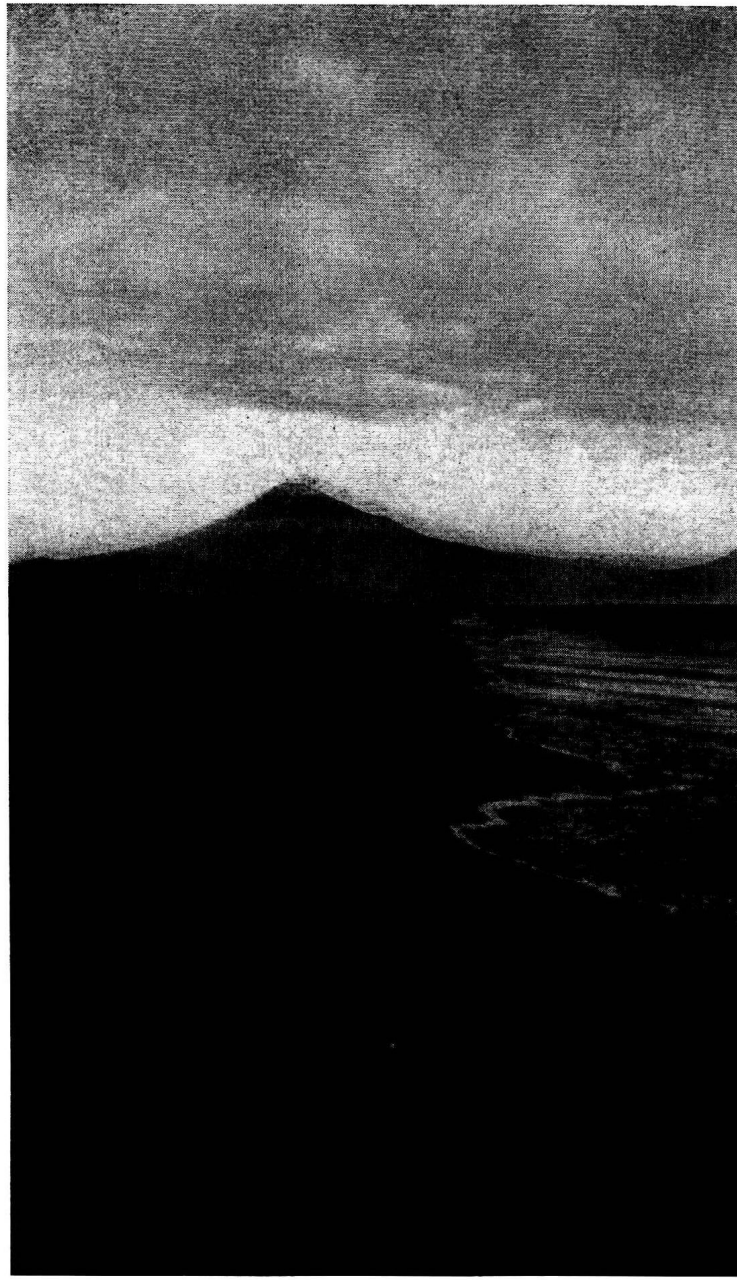
田原街道……一一九
巴江城址―三宅氏と渡邊崋山……一二二
崋山の藝術と遺書―崋山文庫にて……一二八
藩醫成章館と崋山……一三二
仲小路の武家屋敷……一三五
崋山終焉の家にて……一三七
崋山の墓……一四八
句碑と墓石と……一五六

渥美半島　二（伊良湖岬まで）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芭蕉の旅……一六三
杜國の墓……一六六
松岡國男の旅……一七二
磯丸と呪禁歌……一七六
糟谷家にて……一八三
磯丸の墓……一八七
「鷹一ツ」の句碑……一九〇
「椰子の實」の渚……一九二
「伊良虞島」―岬にて……一九五
片濱十三里……一九九
あとがき……二〇三
附圖……二〇五
索引……二〇七

清水と興津と富士山麓



三保の渚の夜明け富士

清水と興津と富士山麓

清水へのいざなひ

清水市といへば、高山樗牛の墓が竜華寺に在り、その樗牛の晩年にゆかり深い興津も、今では市に合併されてゐるし、また古来から羽衣伝説と共に風光明媚で知られてゐる三保の松原などもあつて話題も豊富である。

それだけでも清水は文学的な都会のやうに思はれるが、実際に今の清水を訪れる観光客の目的といへば、市街の西に小高くわだかまる日本平や、その南海岸に突出して今は静岡市内になつてゐる久能山の東照宮を訪れ、ついでに梅蔭寺の清水次郎長一家の墓を見て浪花節的思ひ出にでもひたり、金が余れば三保の松原の観光旅館にでも泊らうか、といふ程度で、樗牛の墓に詣でる人ともなれば、それはもう特殊な観光客といふことになる。さうした一般観光客の行くやうな所へは、わたくしはあまり行きたくない。羽衣伝説や樗牛のことにはつねに旅心を唆られながら、なかなか腰をあげる機会もなかつた。

ところが、戦後になつてわたくしは明治の歌人で禅僧の天田愚庵のことを少しづつ知るやうになり、機会があれば、愚庵が若き日に清水次郎長の養子になり、次郎長に代つて開墾事業の指揮もした富士の裾野の大淵村も調べたいと思つてゐた。また愚庵の「東海遊侠傳」を読んでからは、人間次郎長の姿も迫力を以て来たやうに思は

れた。それまでのわたくしは、恥かしいことながら次郎長を海道一の大親分としてしか知らず、またその生涯を真剣に考へようともしなかつた。だが愚庵の人間像を調べるにつれて、次郎長はわたくしの前に意外にも社会事業家としての姿をあらはすやうになつた。それを知らねば明治といふ時代の認識も曖昧になると思ひはじめた。

たとへそこに高山樗牛の生涯との関係や三保の松原がなくても、次郎長を生んだ清水へは行かねばならぬ。さう思ふとわたくしの胸は悸めいた。——かうして、わたくしが清水の海辺に立つことになつたのも、もとはといへば天田愚庵のいざなひによる、といつてもよい。

三保の羽衣

清水市に着いたのは秋の日のたそがれ時だつた。世話する人があつて宿は三保にとつてあつた。三保の宿といへば聞へはよいが、今は海岸に工業地帯がひろがつてゐて、観光団体などを相手にする宿である。騒がしい酔つ払ひや、窓の下を夜通し走る貨物自動車のひしめきや、近くの海産物工場から流れてくる異臭で、ゆつくり眠ることも出来ない始末。それでも旅の疲れで夜更けてとろとろとまどろんだ。

けたたましい犬の鳴声ですぐ眼を覚すと、もう五時である。まだ夜明けには早いが、海岸の陽の出をみることにして、宿を出た。工場などの立ち並ぶバス通りから、岬に向つて右へ折れると、まもなく松原になり、やがて磯になる。宿を出る頃はまだ夜だつたのに、砂利を踏み、小砂に靴をめりこませながら、波音をたよりに渚に出た頃は、だうやらあたりが白みかけて、大分時間も経つたことを知つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com